

「現地を訪問して思うこと」 1974年3月理工学部数学物理学科卒 中瀬正剛

今からちょうど3年7カ月前の東日本大震災の日にあたる今年の10月11日に、わが立命の復興支援事業の一環として催された東北支援ツアー宮城県コースに参加しました。

あいにくこのツアーに申し込んでから1ヵ月後に、卒業して以来、初めての数物料の同窓会が同じ日に京都で開催されるという案内が来たのですが、迷わずに前者を優先しました。還暦を過ぎると来し方を振り返ってあれこれと考えることがあり、気にかかっていた校友会参加と東北へのボランティアの件を一挙に解決しようと軽い気持ちで応募したのです。

ところが現地で実際に接してみると、未曾有の被災体験にもかかわらず、地元の方々の穏やかな表情で謙虚に話し、応じられる様子、それとなく気付かれぬような何気ない気遣い、淡々としながらもあきらめないかなどをひしひしと感じ、逆にこちらの方が励まされているような気分になりました。この短い旅行中で私には何回も襟を正される場面がありました。今回の旅行のイメージを単語で列挙すれば、石巻水産、さんまの加工工場、木の屋の副社長、笹かまぼこ、佐々木さん夫婦、女川地区、かさ上げ工事、ゆりあげの小学校と中学校、黄色いセイダカアワダチソウの生い茂る広い平地、残った廃屋、波の高さを示す標識、黒い石の墓地群、ガイドの体験談などです。私自身長年中学校の教師をしていたせいか、ゆりあげ中学校の現在の姿に心を打たれました。学校という建物は私にとって特にデジャブを感じる場所です。身の回りにはコマーシャルを含めて、見慣れたり聴き慣れたりしているスローガンがいっぱいありますが、この中学の校舎の前面に大きく掲げられていた、短い文章の甘えない凜とした想いを表している標語が印象的でした。もうすぐ解体されるという横倒しのビルの前を通った時、忘れてしまいたい気持ちと記憶に留めておこうと努める相反するような気持ちが、当地の人々にあるのだらうと思われられました。

百年後千年後に備えて気負うことなく十分に話し合い、記憶に留め続けることこそが東北地方を襲った大津波に対して日本人の心掛けねばならないことでしょう。ボランティアとして観光客として継続して毎年訪れたい場所が、私にとっては東北地方沿岸になりました。来年は岩手県コースか福島県コースのどちらにしようかと友人と話し合っています。それにしても今回は立命館大学のネットワークの底力を感じた旅でした。関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

2016.10.22